

映画評

一般新作

『風の電話』

安井文 謎の美女

2020年 ブロードメディア・スタジオ 139分

監督 諏訪敦彦

脚本 狗飼恭子、諏訪敦彦

出演 モトローラ世理奈、西島秀俊、西田敏行、三浦友和

2019年12月26日、東京イイノホールで開催された『風の電話』完成披露試写に縁あって参加した。

舞台挨拶には諏訪敦彦監督、主演のモトローラ世理奈さん、共演の西田敏行さん、三浦友和さん、西島秀俊さんが登壇。とても静かで雰囲気のある舞台挨拶だった。

『風の電話』は東日本大震災で家族をなくし広島で伯母と暮らす主人公ハルが、ある出来事により家を出て、途中、善意ある人たちに出会い、時には危険な目に合いながら、やがて故郷の岩手県大槌市にある風の電話にたどり着くロードムービー。

諏訪敦彦監督は、物語の流れだけ決めて即興演技で撮影

するスタイル。そこから生まれる自然で生々しいやり取りはドキュメンタリーかと錯覚しそうになる。

モトローラさんの自然な演技がそうさせる。言葉にならない思いを体いっぱい表現しているのだ。

ハルは毎回食事をすすめられる：食事は生きる基本！：食べながら会話して、同時に生きる力のやり取りをするのだ。やがてハルの目は生気を帯びてくる。

“作品は観ている方が完成させるもの。僕はそれを観られないので残念。”と語った諏訪監督の言葉が印象的だった。

『さよなら』『さよならテレビ』

伊藤有紀 映画監督

2020年 東海TV放送 109分

監督 土方宏史 ドキュメンタリー

プロデューサー 阿武野勝彦

森達也監督『FAKE』という作品がある。ゴーストライター問題で世間を騒がせた作曲家・佐村河内守氏のその後を撮影した作品で、観ていく内に、いかにマスメディアが実質以上に佐村河内氏を悪く報道し、彼を告発した新垣氏を善玉として挙句は使い勝手のよいタレントとして取り上げたかが見えてくる作りになっていた。そんな、この映画が写す事象すら「FAKE(偽物)」かもしれないよ…と匂わせて本編は終わるのだが、世の中から行間が失われつつある中、行間のカタマリのような作品だなあと観るたびに感心させられる。

さて、『さよならテレビ』。テーマ的にも構造的にも『FAKE』に似た作品である。軸になる人物は、東海テレビ正社員のアナウンサー、中年の契約社員、若手契約社員の三人。彼らを撮るのは、東海テレビの正社員スタッフだ。それなりに面白く、それなりに凡庸なドキュメンタリーとして、三

者のエピソードをスライドさせながら(時に交じり合いながら)終盤まで映画は進んでいく。(以下、ネタバレ。未見の方は読まないでください)「あれ? けっこう普通の作品だったな」なんて思っていたら、ラスト、観ている側の視座をグラつかせる仕掛けが待っていた。観客がここまで観進めてきた本編中の各エピソードの陰に、実はドキュメンタリースタッフの、主要人物への「こうしたらどうですか」等の働きかけがあった…という種明かしをフラッシュバックで見せていくのである。どこまでが真実で、どこからが人為的なのか。そもそも真実なんて存在するのか。どうですグラついたでしょ? というわけだ。正社員は保身の意識があるためか、終始、契約社員の二人に負うところの多い作品であったが、彼らへの興味や、ラストの仕掛け等により、今作をそれなりに面白く最後まで観たのは間違いない。だが、何か引つかかる…。そう、「個人」の森達也氏が「個人」の佐村河内氏を撮ったのが『FAKE』なら、「正社員」の東海テレビスタッフが「契約社員」の二人に働きかけて撮ったのが『さよならテレビ』なのだ。言うなれば、同じ組織内で立場の強い者が弱い者を撮った作品なのである。テーマや構造は似ていても、「個」と「個」が向き合っ

て紡がれた『FAKE』とは根本的に別物であり、『さよならテ

『レビ』は無意識に強者の意識を振りかざした失敗作と言わざるをえない。今作に行間はない。見えてくるのは作り手の無知と浅はかな計算だけだ。

『パラサイト 半地下の家族』

森次男 スタッフ

2019年 韓国 132分

監督 ポン・ジュノ

出演 ソン・ガンホ

各新聞での評価が高評価であり、ロングラン上映となっていたので、それほど予備知識もなく作品を観た。

冒頭、コメディかと思いきや、サスペンス、ホラー、ヒューマンと、まるでジェットコースターに乗ったかのよう

にドキドキ、ワクワクさせられた。この作品は、韓国映画史上初めてカンヌ映画祭でパルムドールを受賞し、しかも米アカデミー賞でも作品賞を受賞した。アメリカで興行収益32億、フランスでは12億。しかも連続ドラマ化の企画もあるという、これはもう社会現象になりそうだ。同時にノミネートされていた『ジョーカー』も格差社会を描いているが、今回の映画祭ではこういった作品が支持されたのだろうか。

ポン・ジュノ監督はこの作品で監督賞、脚本賞、国際長編映画賞と合わせて最多の4冠となった。彼の作品は2003年の『殺人の追憶』、2006年の『グエムル』漢江の怪物』、2009年の『母なる証明』の3本を観ていて、どの作品も印象深く残っている。これまでも社会の底辺にいる人々を扱った作品を手掛けているが、今回は貧しい家族と裕福な家族が交わり、それが予想もしない事件に発展していくという物語。格差を表すのに貧しいキム家が生活する家は薄汚れた半地下のアパート、一方、裕福なパク家は有名な建築家が建てた高台の高級住宅という分かりやすいシチュエーションだ。

物語は貧しいキム家の息子ギウ(チェ・ウシク)が名門大学の偽造入学証を使って裕福なパク家の女子高校生の英語

の家庭教師として潜り込めたことからスタートしていく。これが寄生の第一段階である。物怖じしない態度で授業初日からパク夫人(チョ・ヨジョン)の信用を得る。次に女子高生の幼い弟の芸術療法士として、妹のギジョン(パク・ソダム)を紹介、この妹のギジョンと兄のギウの顔が実の兄妹のように似ているのだ。巧妙な作戦でパク家の専属運転手と家政婦を追い出し、タイミンク良く父親ギテク(ソン・ガンホ)をパク家の専属運転手、母親チュンスク(チャン・ヘジン)を家政婦として迎え入れ、家族全員がパク家に就職することに成功する。

いとも簡単に裕福なパク家の家族を次々と騙していくあたりまでは、コメディ映画のようだ。コメディというよりブラック・コメディに近い。彼らは寄生するに至る状況に追い込まれているわけである。彼らはちゃんとした人間で、家族全員失業はしているけど、ひとりひとり様々な能力をもっているのだ。それでも仕事が見つからず、貧しい生活から脱却するために裕福な家族に寄生していく。特に息子のギウは頭の回転が良く、次々と無謀な計画を立てていく。彼らは裕福なパク家に寄生していくのだが、裕福な家族もこの貧しい家族に頼らないと何もできない。だからお互いに寄生しあっているのだ。ストーリーの大半は豪邸が舞台

となっており、豪邸の構造にこの物語の重要な秘密が隠されている。

物語の中間あたりからクライムアクションに移っていき、次から次へとストーリーが展開していく。そして、彼らによつて追い出された元家政婦のムングアン(イ・ジョンウン)が深夜に戻ってきたことから、少しずつ綻びが出てくる。元家政婦ムングアンも物語のキーマンなのだ。無謀な計画はこの元家政婦の知る事となり、事態は急変していく。この辺りから観客はキム一家に感情移入させられる。

ネタバレになるがこの映画でジュノ監督は韓国社会に根づいていたものを表現したかったそうだ。それは“匂い”で格差を表すアイデア。映画で表現するのは凄く冒険であり挑戦だ。人の匂いは親しい人の間ぐらいでしか嗅ぐことができない親密なものだ。私も嗅覚が敏感で人の口臭や体臭に直ぐに反応してしまうので理解できる。この作品では裕福な家族に仕える階級の異なった運転手、家政婦に近づくことで、長年にわたる生活臭(悪臭)が伝わり、無意識のうち差別してしまうことで悲劇を迎えてしまうのだ。

しかし、観客はラストのラストで、まんまとジュノ監督に騙されてしまうのである。監督には、これからも全世界に旋風を巻き起こしてほしいと願う。

『宇宙の法則』

保田興志彦

MugiCafe オーナー／むぎの部活動！「えいが部」部長

1990年 大映 116分

監督 井筒和幸

脚本 旭井寧、井筒和幸

撮影 篠田昇

出演 古尾谷雅人、鳥越マリ、横山めぐみ、

長塚京三

身近な一宮市が舞台のこの映画。タイトルは「宇宙の法則」と壮大ですが、物語は一宮の繊維業の社長の物語。

機屋（はたや）の父親との仲が悪く、故郷を捨てた主人公良明は、東京でデザイナーとして活躍していたが、急死した父の跡継ぎの事で兄と口論となり、一宮に帰るという物語。

東京の恋人や家族などに翻弄されながらも、自分らしく生きる覚悟を決意した、男の生き様のストーリー。

この映画は、一宮生まれの個人の方が資金調達され、井筒和幸氏に監督を依頼し制作されたものとの事で、興行としてはヒットしなかったが、出演された俳優、女優が映画賞を受賞する程の隠れた名作です♪30年前の映画ですが、後継者や廃業の問題など今もなお続く課題だと考え、日本は30年間もずっと同じ問題を抱えているのだなど。

技術的な特徴は、この映画が世界初の「デイトフィルム」だけで撮影された作品だという事。撮影監督は『スワロウテイルバタフライ』や『世界の中心で、愛をさけぶ』の撮影監督の故篠田昇さん。52歳という若さで亡くなられてしまいましたが、映像が本当に美しく、幻想的に映る裸電球や田園風景の素晴らしさに感動します。『世界の中心で、愛をさけぶ』にて日本アカデミー賞最優秀撮影賞も受賞されております。

それにしても個人調達の予算の割には、今考えるとキャストの豪華で个性的な事。主人公の古尾谷雅人さんはこの13年後に亡くなってしまおうのですが、横山めぐみさんの綺麗さや、兄役の長塚京三さん竹中直人さんなど、今とな

つては凄い役者揃いの作品です。

題名となっている「宇宙の法則」ですが、その題名通り運命や時代という大きなものに逆らえない中にも、その「宇宙の法則」に抗いながらも、自分の信念を貫きつつ進んで行く、古尾谷雅人さんの姿は、とても共感できる作品です。人によっては名前負けという話も聞いたりしますが、私も「宇宙の法則」と戦いながら進んでいるつもりなので、大好きな作品ですよ。

『狂わせたいの』

旧作レンタル

ときどき映画館

1998年 石橋プロダクション 60分

監督・脚本 石橋義正

出演 岡本孝司 分島麻美

石橋義正監督作品に出合ったのは、私がうら若き高校生時代の時であった。同級生から勧められた深夜TV番組「バミリオンプレジャーナイト」に心を打たれ、その録画されたビデオを擦り切れるまで見たのはいい思い出。のちに、お茶の間をにぎわした番組「オーマイキー」の原型であり、やはり私の目に狂いはなかったと自負している。

「バミリオンプレジャーナイト」にハマった私は、この『狂わせたいの』の映画にたどり着く。当時大学生、様々な映画を鑑賞してきたが、今でも観ている映画のひとつである。私にとってこれ以上の邦画のミュージカル映画は他にはないと言えよう。

内容としては、一人のサラリーマンを中心に、様々な美女が音楽とトラブルを持ち込んで来る、そんな感じだ。漫画で言えば、さえない主人公が色とりどりの女の子にモテまくる萌え漫画みたいなものだ。はじまりから終わりまで、スキなくあつけにとられ、いつの間にか終わっている。

この映画の良いところは、曲にもあり、山本リンダの「狂わせたいの」からはじまり、いしだあゆみ「太陽は泣いている」で終わるところだ。自分の中では、映画のテーマ曲は、最新の曲と一緒に作られるのがほとんどで、映画のためにそれまであった曲を使うのがなかった。日本のミュージカル映画に触れていなかったためか、当時、この手法でミュージカル映画を観た自分へのインパクトは相当なものだった。

私は、石橋義正氏の作った、この「バミリオンプレジャーナイト」と『狂わせたいの』を、自分が目指したい世界観であると思っている。単純に言うとな条理が最大のエン

タータイムメントといったところか。

これを機に、皆様も、是非手に取ってみて欲しい、と言いたいところだが、あいにく現在では近くのレンタル屋には置いていない。VHSを持っているが、DVDをレンタルしたく探したが、渋谷のツタヤにあるのを見つけ、東京に行くついでに借りてきた。しかし、置いてあるコーナーがなかなか見つからず、ようやく見つけた先がポルノコーナーだったとは。邦画ミュージカルの発展もまだまだ先か。対をなす洋画ミュージカル映画『シカゴ』これもまた最高傑作である。

『青葉学園物語』

村上 暁 スタッフ

1981年 日活児童映画 100分

原作 吉本直志郎

監督・脚本 大澤豊

出演 市毛良枝 鈴木瑞穂 赤塚正人

懐かしい映画を観た。1981年公開の『青葉学園物語』だ。小学生の時代以来、約40年ぶり。ソフト販売やレンタルがないので、鑑賞するのに苦労した。インターネットで検索し、ようやくこの映画の上映会の案内を見つけた。

久々にこの映画を観たいと思ったのは、たまたま図書館で一冊の本を見つけたからだ。「青葉学園物語」の第2巻「さよならは半分だけ」。小学生のころ大好きで、何度も読み返した。このシリーズは人気が高かったので、映画化されたのだろう。5年生か6年生の時に、学校の行事で映画鑑賞会に連れて行ってもらった。映画を観て感動したという経験は、これが初めてだったと記憶している。

大阪府吹田市立平和祈念資料館では、毎月「平和映画会」が行われている。戦争と平和をテーマにした映画やドラマ

が、月替わりで上映されている。2020年1月の上映映画が『青葉学園物語』だった。1月15日の朝早く家を出て、車で吹田市へ向かった。

吉本直志郎著「青葉学園物語」は、全5冊の児童文学。敗戦後7年が経過した広島、原爆孤児のための養護施設「青葉学園」が舞台となっている。登場するのは孤児たちだが、明るく元気に学園で生活することもたちの様子が楽しい。シリーズ第1作の「右むけ左」から、第5作の「まっちゃん、涙」まで約1年半、山や川の季節の移り変わりと、その中でのこどもたちの遊びと成長が描かれている。

学園にはいくつかの寮があるが、その中の一つであるなつめ寮の小学生五人が、シリーズを通して活躍する。

6年生の和彦は、わがままなリーダーとしていばっている。ポータンと清は同じ5年生だが、精神年齢が全く違う。ポータンは副官役で、和彦にも年下の子供たちにも気配りをする。清はおっとりした食いしん坊。3年生のマコトと1年生のタダシは、グループのマスコットのキャラクター。子供らしさ全開で、天然の言動が周囲の笑いを誘う。

シリーズ第一作「右むけ左」を初めて読んだとき、冒頭

の子供たちの会話が面白くて、一瞬にしてこの物語のとりこになった。

「おおい、おれもいれちくれい。」「あれ、ターぼう、おまえ小便して、チンコをしまい忘れとるじゃないか。」「はははう！」「ふははは、おまえ、チンコでジャンケンするつもりか。」

明るく元気な子供たちは、魚取りをしたり、野球をしたり、食糧庫から失敬した缶詰で青空宴会をしたり、外で元氣よく跳ね回っている。戦後7年経過後とはいえ、まだ食糧事情は厳しいようで、子供たちの食べ物への執着心はすごい。食べ物を得ようとして失敗するエピソードが、面白おかしく描かれている。

平和祈念資料館のミニシアター(定員40名)は満員の大盛況。ワクワクしながら上映開始を待った。

映画版『青葉学園物語』は、夏の川原で子供たちが魚取りをしている場面からスタートする。こどもたちの姿が、小説の中のキャラクターとぴったり一致する。和彦は生意気で利かん気な顔、ポータンは利口そうな顔、清は食いしん坊を体現している丸顔と体、マコトとタダシはフルチンで乳歯の抜けた口をあけて笑っている。小説と同じく、一

瞬で映画の中へ引きこまれる。

ストーリーは、第1作の「右むけ左」、第2作の「さよならは半分だけ」、第3作の「跳ぶんだったら、いま」の中のいくつかのエピソードをつなげている。爆笑エピソード、「ぶたぶた会議」、「したむき会社」では、大きな笑い声が起こった。

映画の後半、子供たちは、たまたま入ったうどん屋で、子や孫をなくした老夫婦に出会う。原爆で家族を失った悲しみを、おじいさんは子供たちに語る。同じく原爆で親を亡くした和彦、ポータンは、普段は忘れていた両親のことを思い出す。ポータンの言葉、「おれのお父さんやお母さんじゃって、ときどきは思いたさんといけんのじゃ。すっかり忘れてしもうちやあ、いけんのじゃ」。深く胸にしみいる。死者に対して思いを致すこと。自分たちが普段忘れていたことを、おじいさん、和彦、ポータンから教えられた気がした。

上映が終了したとき、自然と拍手が起こった。この素晴らしい映画と、上映会を企画した資料館への感謝の拍手だった。

原作の「青葉学園物語」は、現在絶版であり、一部の図

書館でしか読むことができない。映画も、前述したとおりDVD販売等がされていないため、こういった上映会でしか観ることができない。

核兵器、戦争の恐ろしさが忘れられようとする現在こそ、この作品が評価され、多くの人に観てもらえるよう復活してほしいと強く感じた。

『セデック・バレ』

水野圭次郎 むぎのえいが部

2011年 台湾

監督 魏徳聖(ウェイ・ダーション)

出演 林慶台、馬志翔、安藤政

ピアノ・スー

『セデック・バレ』の原作は、台湾の原住民史を描く邱若龍の漫画「霧社事件」です。ウェイ監督はこの漫画を読んで心が騒ぎ、血が沸き立ち、いつか映画化すると心に誓ったそうです。

「霧社事件」とは日本統治下後期(1930年)の台湾最大の原住民による抗日蜂起事件で、セデック族、日本人共に多くの犠牲者を出しました。

元々セデック族は台湾の山岳地帯で狩りや採集をして自由に過ごし、狩り場を侵すものを容赦せず首を狩るという原始的な生活を送っていました。そこに皇民化の名の下、木材や鉱物資源を手中に収めるため、日本軍が部落に入り、セデック族を統治していきます。自由を奪われたセデック族は日増しに不満を高め、勝算がないと知りながら、部族

の誇りと狩り場を守るために日本軍と全面対決を開始します。

セデック族を演じている者の多くは原住民の血を引き、役者経験がないものの自らのアイデンティティー確立のために出演を決めたそうです。若き日の主人公モーナ・ルダオを演じたダーチン、タダオ・モーナ役のティエン・ジュンの野性味溢れる顔と動きが素晴らしく、老成したモーナ役の林慶台は顔に刻まれた皺や表情に深い風格があり、頭目にピッタリでした。本業は牧師とのことです。

製作にはジョン・ウーが関わり、アクションには韓国人監督、美術やプロダクションデザインには日本人が関わっています。日本の俳優も安藤政信、川原さぶ、木村祐一、田中千絵、ディーンフジオカなどが出演しています。

これまで多くの抗日映画を中国で見ましたが、中国人が残酷非道な日本軍人役を演じ、妙な日本語を話し、一方的な内容のものが多かったです。しかし、この映画はセデック族、日本人とも感情のある人間として描いており、日本人役を日本人が演じることで不自然さが少なかったと思います。

台湾を中国人の国と誤解している人が多いと思いますが、中国人が移住する遙か前から多くの原住民が暮らしていました。この映画を観て、民俗の伝統や誇りを守り、自らのアイデンティティを確立することの大切さを知りました。映画の中に登場した民族衣裳・歌・踊りと自然豊かなロケ地にも感動させられました。

私は今年2月下旬に台湾のタイヤル族の集落を撮影に行くことを決めました。どんな出会いがあるか今から楽しみです。

ポルノ

豊楽志夫　ブラックシープ

嗚呼！日活ロマンポルノ

昨年（1995年）の日本映画は、ポルノらしきものは『火口のふたり』ぐらいで、閑古鳥が鳴いていた。どうして撮らなくなってしまったのだろうか。そこで今回は、70年代に日活ロマンポルノが開花しサブカルチャーとして認知されるようになった頃の裏話を紹介しよう。

『一条さゆり 濡れた欲情』（1972年）の裏話

主役に起用された新人の伊佐山ひろ子は、この脚本を書いた監督の神代辰巳に連れられて、撮影前に日活本社に挨拶に行った。神代が担当役員にその脚本を見せると、パラパラと見てテーブルの上にポーンと投げ出した。その頃、神代はデビュー作『かぶりつき人生』が日活開闢以来の不入りで、干されていた。それにぱつと目に華のない伊佐山も気に入らないようだった。神代は説明しても分かってもらえないと思ったのか、「いいんだよ、この子は絶対いいんだ」と言ってくれた。伊佐山は子供ながら（当時高校生）「何べんもお茶を飲んだり、ご飯を食べさせてくれるオジ

さんになんてことをするんだ」と思ったという。彼女は元々新劇の舞台を目指していたので、映画はアルバイトのつもりだった。しかしこの場面に出くわして、「よし、やってやろうじゃないか！」と決意したという。

（映画芸術1995年夏号）

この映画は、関西ストリップ界の女王と言われた一条さゆり自身が出演し、彼女のローソク・ショウの舞台や警察の手入事件など実話をもとに構成したものだ。その彼女にライバル意識を燃やす若いストリッパー役を伊佐山が演じた。

伊佐山はまだ十代で生意気な盛りだった。たびたび人を喰ったような態度を取り評判が悪かった。そんな彼女が一条を相手に、ひもを連れた若いストリッパーを天衣無縫に演じ、その仕事が立派な職業であることを立証して見せた。そして、ポルノ女優として初めて1972年のキネマ旬報主演女優賞を受けることになり、映画界は天地がひっくり返ったような騒ぎになる。この事件はそれまで日陰の存在だったポルノ映画が広く認知されるきっかけとなる。

この映画で、私の記憶に残っている強烈なシーンがある。それはこの伊佐山扮するストリッパーが手入れ受けて警察にしょっ引かれた時のことだ。伊佐山は警察署の前へ来る

と突然素っ裸になり、「何回挙げられたらムショに入れられるの？」と叫んだのだ。ポルノ映画が単に男と女のファックシーンを描いているだけでなく、そこには横暴な権力に対し、もの申しているところも、ちゃんと撮っていたのである。神代は、こういうところは如才なかった。

『濡れた欲情特出し21人』（1974年）のロケ逸話

この映画の※スクリプター（記録係）を務めた白鳥あかねが面白い話をしている。それによると、浅草のロック座が信州の上山田温泉に店を出していた頃、そのママさんの口利きで、上山田のストリップ小屋を借りて日活のロマンポルノ『濡れた欲情特出し21人』を撮ることになった。そこでは昼間は周辺にロケに出かけ、夜はその温泉のストリップパーたちの踊りを撮影するという日が続いた。

彼女たちとは自然に親しくなり、夜が遅いのに仕事が終わってから、朝飯を作るなど何かと面倒を見てくれた。で、せめて打上の夜はロケ隊が彼女たちを慰労しようということになり、ストリップ小屋をその日だけは閉めさせて、スタッフが中心になって走り回り飲みや踊れやのドンチャン騒ぎをした。

スタッフたちが裸になって踊り出すので、白鳥も「私も

参加しなくちゃ」と脱ぎだすと、照明班にパーツとライトを当てられる。これがなかなか気持ちいいもので酔いも手伝ってドンドン脱いでいったら、何故か、「もういい、もういい」(笑)と止められる。しかし世話になったストリップパーたちには絶対踊らせなかった。

彼女たちは「私ら今までは、まるで世の中の外れ者として人から白い目で見られてきた。でも、東京から来た映画の皆さんは、全く私たちを差別せず仲間として見てくれた。こんな扱いを受けたことはない」と泣き出す者も出たという。

ところが宴の途中で酒が切れ、買うお金がない。そこで、何ごとかと見に来ている隣の座敷の団体さんに声をかける。「アンタたち見たい」「はい!」「じゃ、お酒持っていらいっしやい」と誘い込み、そして芹明香らがお手のもので机の上で踊りだす。向うはたまらなくなってきた、どどん酒を持ってきて「お願いします。入れてください」てな、調子で、最後まで酒に不自由はしなかった。後でマネージャーのMに「俺が甲斐性ないからこんな目に合わせて・・・」と泣かれた。

東京に戻るとすでに事の顛末はバレていて、先輩のAさんから「スクリプターはストリップパーではありませんよ!」

とキツク言われた。白鳥はスクリプターの草分け的存在で脚本も手がけている才媛。二度ほど会ったが、オトコマエのめちやくちゃ面白い人だ。

白鳥といえば、もう一言書いておきたいことがある。それは片桐夕子が『夕子の白い胸』(1971年、近藤幸彦)で初めてポルノに出た時の話である。片桐はそれまで一般映画しか出ていなかった。彼女は無理矢理口説かれて脱いだため、馴れないセックスシーンになると泣いた。そこで白鳥は「そこで目をつぶって」とか「少し声を出して」とか添い寝をしながら助言した。彼女もロマンポルノを成功させるために恥ずかしいと言っておられず必死だったという。そして、挙句の果て、撮影所仲間に殺陣師(タテシ)に対して横師(ヨコシ)と呼ばれるようになったと言う。ことほど左様に日活ポルノを軌道に乗せるまでは裏方の苦労も大変だったのである。この時代の日活ロマンポルノは映画以外でも多くの人間ドラマを残している。

(「スクリプター」女たちの映画史 日本テレビ放送)

※スクリプター…撮影現場で監督の横に位置し、撮影が翌日に続いた

りしても支障の出ないよう登場人物の衣装、小道具まですべてチェック記録する仕事。影の監督とも呼ばれた